

ICRP と ECRR のバトル —其の 2—

2013 年 7 月 30 日

齋藤 修

其の 1 で ECRR の主張する特異な線量に対するリスクの応答（2 相的線量応答）についてその考え方の欠点を指摘し、彼らの主張する高い放射線リスクは受け入れられないことを解明した。ここでは ECRR のその他の ICRP に対する批判及び ECRR に対する筆者及び各界からの批判について述べたい。

1. その他の主な ECRR の主張

其の 1 に述べた事項のほかに ECRR が述べている主な主張点を紹介する。

- ①ICRP は功利主義的な費用－便益計算に基づいており、この方式は、奴隷社会を正当化するために使われるものであり、倫理的に正当化出来ない。放射線は小さくても致死的危害の可能性があり倫理的に正しくない。
- ②住民の被曝線量を正確に把握できない。正確な個人線量は把握が難しくまた蓄積線量の取り扱いの問題もある。
- ③ストロンチウム、プルトニウムあるいは劣化ウランなどの人工放射性物質による内部被曝については特別な考慮が必要である。
- ④がん発症のプロセスについては未だ解明されておらず、ICRP のモデルはセラフィールドのケースで表れたリスクの 300 分の 1 しか評価していない。
- ⑤本委員会の研究結果によれば低線量域において 2 相的な線量応答が正しいと結論する。
- ⑦線量を平均化する取り扱いはホットパーティクルの影響や細胞分裂中のリスクを無視する事につながる。
- ⑧本委員会はチェルノブイリ後の小児白血病及びミニサテライト DNA 突然変異などの疫学調査を漏れなく調査し、ICRP のモデルが 100 から 1000 倍少ないリスクを表示している事が判明した。大気圏核実験と 1945 年以降の原子力施設の運用により 1989 年までに 6160 万人が死亡している。これを ICRP モデルによると 117 万人余の過小評価になる。
- ⑨本委員会のモデルを支持するベラルーシの原発事故の影響報告とトンデルによるスウェーデンにおけるチェルノブイリ事故の影響がある。
- ⑩本委員会は公衆の線量限度を年 0.1mSv に、作業者の限度を年 5mSv に引き下げることがを勧告する。

2. ECRR に対する筆者の批判

- ①費用－便益計算：ECRR はこの計算手法を奴隷社会を正当化するのに使用されていると批判しているが、この方法は通常使われている手法であり、なんら非難されるものではない。ECRR の主張はこの例に見るように非常に判断が偏っており、しかも倫理的でな

いなどと一方的に決めつけている。

- ②その他の項目もその主張を客観的に裏付ける論拠を明確に表示せず、一歩的に決めつけている。

またチェルノブイリ事故に関する疫学調査の事例として挙げているケースについてはいずれも WHO、IAEA、UNSCEAR などの専門家会議で認められていないものである。

さらにチェルノブイリ事故の影響でがんが増加したと ECRR が主張するスウェーデンのトンデル論文については、当初の論文では「放射線被ばくががん増加に関係している可能性がある」としたがその後再調査の結果に基づいて 2011 年にトンデル氏本人が修正論文を公表している。その論文のアブストラクトによると「明白な、そして期待されたような、直線的な被曝との相関関係は見いだされなかった」、「乳がん、甲状腺ガン、白血病については、顕著な相関関係は見られなかった」とされている。

- ③公衆の線量限度を年 0.1mSv にすることを勧告しているが、限度を自然放射線レベルの 20 分の 1 にすることは根拠が無いし、其の必要性もない。作業者の限度を 5mSv にすることを勧告しているが、論拠がない。現在の限度（5 年間で 100mSv）で特に問題があるわけではない。

3. ECRR に対する世界の批判

ECRR に対するウィキペディア批判として次が記載されている。

- ①英国健康保護局による批判

2003 年の ECRR 勧告『放射線防護を目的とした…』は、発表されてまもなく、英国健康保護局(en:Health Protection Agency)による批判が加えられた。同局は、ECRR を「公的機関と関わりのない独自(self-styled)の組織」とした上で、「恣意的であり、十分な科学的根拠を持たず、ICRPに対して多くの曲解が見られる」とした。

- ②今中哲二による批判

ECRR の低線量被曝リスク評価について、反原発派の今中哲二（京都大学）は、内部被曝が危険という ECRR の 3 つの立脚点を「1. ホットパーティクルが危険（20～1000 倍）2. Sr90 が危険（300 倍）3. 線量・効果関係に 2 つの山（極低線量で影響が大きい）」とした ECRR 勧告への個人的感想として「セラフィールド小児白血病などのデータを内部被曝によって説明しようという問題提起は、仮説としては面白い」「しかしながら、仮説を実証するデータはほとんど示されていないし、リスク評価手法全体に一貫性が認められない」「ECRR のリスク評価は「ミソもクソも一緒」になっていて付き合いきれない」「ECRR に安易に乗っかると、なんでもかんでも「よく分からない内部被曝が原因」となってしまう」と述べている。

4. ECRR の福島事故に対する対応

ECRR はトンデル論文が発表されると直ちに、トンデル氏は放射線が原因としたわけではなく、「放射線が関係している可能性がある」として追加の調査の必要性を示唆しただけなのに、トンデル氏が放射線が原因であると述べたかのごとく勝手に変更解釈して世間に喧伝し、まだ評価が定まっていない論文の数値を利用して福島住民に今後 10 年間に 10 万人のがん死亡が発生するという資料を作成した。ECRR の宣伝部長 C.バズビイは来日した際福島をはじめ日本国内各地で喧伝した。週刊誌をはじめとするマスコミは大々的にこれを取り上げ放射線の恐怖を煽った。ECRR の宣伝に乗せられたと推測される NHK の一部分子はトンデル論文を取り上げ ICRP 批判の報道を行った。

現在我が国の放射線一般人の放射線安全基準に対する混乱の原因にはいくつかの要因があるが、このような ECRR の宣伝活動及びマスコミの放射線忌避の報道が大きな要因の一つであると考えられる。

ECRR がまじめに放射線問題を取扱う団体であればトンデル氏の新論文を取り上げて新しい評価をすべきであるし、トンデル旧論文を基に低線量放射線のリスクを報道した NHK もトンデル論文の修正を多くの人に伝えるべきであろう。それが責任ある報道機関の態度である。